

# 【身体障害者療護施設における男性職員による女性利用者の介護について】

## 1. 研究者の所属と氏名

身体障害者療護施設 下関幸陽園 芥川恵美子 相原宏 藤本幸恵  
JA 下関在宅ケアセンター 船津幸美

## 2. 研究の背景と目的

従来「介護は女性の仕事」と思われがちであったが、近年、特に介護福祉士養成校が創設されて以来、さまざまな介護の現場で男性介護士の進出が見られるようになった。研究対象の療護施設でも、男性介護士の割合が平成 11 年までは 0% だったが徐々に増加し、平成 19 年には 20% となっている。男性介護者も含めた人員構成の中で、同性介護が望ましいが、現状では異性介護の場面も多い。こうした背景の中、男性利用者が女性職員に介護されることにはあまり抵抗はないが、女性利用者が男性職員に介護されることには抵抗があるのではないかと。特に入浴介護や排泄介護の場面ではそれが、多く感じられるのではないかと。また、男性職員にとっても女性利用者への身体介護に対して疑問に感じていることもあるのではないかとという仮説を立てた。

そこで、男性職員が現状で行っている、女性利用者への身体介護の内容や、男性職員が女性利用者を介護する上で、利用者や介護者にストレスや抵抗があるのか、あるとすれば、どのような介護場面かを知り、介護に抵抗がある場面での、男性職員の女性利用者への関わり方を考えることで、利用者・介護者双方の違和感が軽減されるのではないかと考えた。

## 3. 研究方法

### (1) 研究対象

- ①身体障害者療護施設「下関幸陽園」の意思表示可能な女性利用者 16 名と男性利用者 16 名の計 32 名。
- ②山口県内にある身体障害者療護施設 8 施設の男性介護士 40 名と女性介護士 40 名の計 80 名。  
(各施設から男性介護士 5 名、女性介護士 5 名を無作為に選出)

### (2) 研究期間

平成 19 年 9 月 1 日～平成 20 年 5 月 31 日

### (3) データ収集の方法

文献や介護職員の意見をもとに、異性介護に関する調査項目を、介護者・利用者別に作成した。介護職員に対しては、①回答者本人の属性、②異性利用者に行っている身体介護の内容、③異性に対して行っている身体介護についての抵抗度、④異性に対して行っている身体介護について感じていること、利用者に対しては、①利用者の属性、②受けている身体介護の内容、③異性職員から受けている身体介護についての抵抗度、④異性職員から受けている身体介護について感じていることについて、アンケートを実施した。職員に対しては、郵送及び手渡し。利用者にはインタビュー法を用いた。

### (4) データ分析の方法

- ①収集したアンケートを対象者別（施設別）に、項目毎にデータ化する。
- ②施設や利用者の属性については図表化した。
- ③身体介護の各項目は、①のデータをもとに選択肢を、抵抗がある・どちらでもない・抵抗はないの 3 つにし、(アンケートは 5 段階でとったが、どちらかといえば抵抗があるは「抵抗がある」に、どちらかといえば抵抗はないは「抵抗は無い」に統合) 百分率で表した。その際、小数点以下は四捨五入し、整数で表した。合計が 100% にならない時は、最も大きい値で調整した。
- ④自由記述については同意見毎にまとめ、標本数を記入した。

5. 結果

①回収結果 介護職員調査：抽出80標本 回収70標本（回収率 87.5%）  
利用者調査：抽出32標本 回収32標本（回収率 100%）

②男性職員数の割合

回答のあった7施設の全介護職員の総数は203人で、その内男性職員数は46人で全体の23%だった。介護職員4人に1人が男性介護士である。

③異性介護の実施状況

男女を問わず、全員が何らかの形で異性への身体介護を行っている。

女性職員はすべての介護で全員が異性への介護を行っている。（参考 表1-④）

それに比べ、男性職員は移乗・移動、食事、洗面・整容介護で全員が異性介護を行っているものの、排泄・更衣介護で86%、入浴・清拭介護で80%となっており、入浴・排泄・清拭・更衣等肌を露出する介護については、同性介護を徹底しているところもあった。（参考 表1-②）

④異性介護の内、抵抗度の高い介護（表I・II参考）

男性職員における介護の抵抗度の高さは排泄・入浴・更衣・清拭介護いわゆる肌を露出する介護が上位を占めている。生理の介護では特に抵抗度が高い（表I-①）。女性職員は男性職員ほど肌を露出する異性介護に対する抵抗は無いが、むしろ移乗・起居・移動介護等、力を必要とする介護において抵抗度が高くランクされている。（表I-②）

女性利用者の異性介護に対する抵抗度が高いのは上位14の介護のうち、歯磨きの介護を除けば、排泄・入浴・更衣等、すべてが肌を露出する介護である（表II-②）。男性利用者の異性介護に対する抵抗度が高いのは上位14介護のうち、肌を露出する介護は6つで、歯磨き・洗顔・摂食・移乗・移動等過半数以上が肌を露出しない介護である（表II-①）。異性介護に対する抵抗度は男性利用者よりも女性利用者の方が高い。（表II-①・②）

男性職員と女性利用者の抵抗があるとした介護内容で共通するものは11項目あり、すべてが肌を露出する介護である。特に生理、排泄介護（おむつ）の洗浄、入浴介護の洗体で、男性職員、女性利用者ともに、高い数値で抵抗があると回答している。（表I-①・表II-②）

反面女性職員と男性利用者の抵抗度の高い介護内容で、共通するものは全体で8項目あり、そのうちの3つが移乗・起居・移動で、特に肌を露出する介護においては前者に比べてこだわっていない。（表I-②・表II-①）

自由記述を含めその他個々の介護場面における結果は、考察で述べたい。

異性介護の内、抵抗度の高い介護

表I-①

男性職員

	介護内容	抵抗がある	介護を行っている人数
1	排泄（生理）の洗浄	68%	25人
2	排泄（生理）の交換	59%	27人
3	排泄（生理）の清拭	50%	26人
4	排泄（生理）の後始末	46%	26人
5	排泄（おむつ時）の洗浄	34%	29人
6	入浴の洗体	33%	20人
7	排泄（おむつ時）の清拭	24%	29人
7	更衣の脱衣	24%	29人
7	更衣の着衣	24%	29人
10	排泄（生理）の準備	22%	27人
10	清拭	22%	27人
10	入浴の衣類の着脱	22%	27人

表I-②

女性職員

	介護内容	抵抗がある	介護を行っている人数
1	移乗	26%	35人
1	排泄（おむつ時）の洗浄	26%	34人
1	排泄（おむつ時）の清拭	26%	35人
1	入浴の洗体	26%	35人
5	清拭	20%	35人
6	起居動作	18%	34人
7	更衣の着衣	14%	35人
8	トイレの着衣の上げ下げ	14%	35人
9	入浴の衣類の着脱	11%	35人
9	更衣の脱衣	11%	35人
9	移動	11%	35人

表Ⅱ—① 男性利用者

	介護内容	抵抗がある	介護を受けている人数
1	歯磨き	100%	1人
2	排泄（おむつ時）の洗浄	67%	3人
2	排泄（おむつ時）の清拭	67%	3人
2	排泄（おむつ時）の後始末	67%	3人
5	洗顔	50%	2人
5	摂食	50%	2人
7	起居動作	33%	6人
7	整髪	33%	3人
9	清拭	30%	10人
10	更衣の準備	25%	8人
10	更衣の脱衣	25%	8人
10	移動	25%	4人
13	移乗	22%	9人
13	更衣の着衣	22%	9人

表Ⅱ—② 女性利用者

	介護内容	抵抗がある	介護を受けている人数
1	排泄（生理）の交換	100%	1人
1	排泄（生理）の洗浄	100%	1人
1	排泄（生理）の清拭	100%	1人
1	排泄（生理）の後始末	100%	1人
5	排泄（トイレ時）の後始末	56%	9人
6	歯磨き	50%	4人
6	排泄（おむつ時）の洗浄	50%	4人
6	排泄（おむつ時）の清拭	50%	4人
6	排泄（おむつ時）の後始末	50%	4人
6	トイレの着衣の上げ下げ	50%	8人
11	入浴の洗体	47%	15人
12	更衣の脱衣	43%	14人
13	更衣の着衣	36%	14人
14	入浴の衣類の着脱	33%	15人
14	清拭	33%	12人

## 6. 考察

男性利用者が女性職員に介護される事にはあまり抵抗はないが、女性利用者が男性職員に介護されることには抵抗があるのではないかと、特に入浴介護や排泄介護の場面でそれが多く感じられるのではないかとという仮説に対して入浴介護の衣服の着脱（参考 表2—②）、入浴介護の洗体（表2—④）、トイレ介護の着衣の上げ下げ（参考 表4—③）、トイレ介護の後始末（参考 表4—④）、更衣介護の脱衣（参考 表5—③）、着衣（参考 表5—④）、また、異性介護のうち抵抗度の高い順に列挙した表Ⅱ—②においても裏付けできる。

生理の介護については、男性にはないので比較は不可能だが、介護する男性職員は表4のように、かなり高い数字で抵抗があると回答している。男性職員による女性利用者への身体介護に対して感じている事（自由筆記 参照 表9—①）においても「生理への対応は同性介護が望ましい、あるいは行うべきではない」と言った女性職員の意見も多数あった。得られたアンケートの回答の中で生理の介護を受けている女性利用者は1人だったが、抵抗があると回答している。標本数が少ないためこの数字をそのまま鵜呑みにするのは早計だが、傾向として生理の介護をしてもらうことには抵抗があると推察できる。

意外だったのは、起居動作・移乗動作の介護で、女性利用者よりも男性利用者、男性職員よりも女性職員が抵抗があると回答した点である。アンケートを実施する前は、抵抗の有無は主に「羞恥心」に起因すると考えていたが、起居・移乗介護のような力の必要な介護は、利用者は男女とも、力のある男性職員にしてもらう方が安心するようである。

また、自由記述からは次のような結果が得られた。

男女とも、同性介護（特に入浴・排泄、中でも生理介護においては特段に）が望ましいといった意見が多かった。このことは前半のアンケート結果を反映している。他方、人員配置上やむを得ないのではないかとという意見も同数程度あった。

仕事として割り切っているという意見がある反面、利用者・家族がどのように受け取っているのか気になる、申し訳ないと思っているという意見が男性介護者に多く見られた。女性職員においては異性介護は基本的に好ましくないとしながらも、利用者の受け入れ次第ではないかという意見が多く見られた。女性職員に比べ男性職員の方が、異性への身体介護に対して葛藤していることが伺える。

また、最初は抵抗があったが慣れていったという意見もあり、このことは利用者に対しても、異性介護になれることで羞恥心が薄れていくのではないかという意見に相通じるものを感じた。

利用者の意見としては、「プロとして行なっているのだから」「人による」等の意見が多く、男性・女性としてよりどのような介護を受けられるのかに重きを置いているようだ。しかしながら、生理介護を含め入浴や排泄介護は同性介護を望むとしながらも、介護してもらっているのだから仕方ない、慣れるしかないといった意見もあり、このことは、羞恥心がなくなってきたとした職員の意見と照らし合わせて考えると共に、利用者の真の気持ちを重く受け止める必要を感じる意見であった。

改善や工夫についての記述では、利用者の意思を尊重する、出来るだけ同性介護を心がけていくといった意見に続き、介護技術（コミュニケーションを含む）を向上させることで、羞恥心へのカバーをしていく、職員配置をバランスよくする等、同性介護をよしとする意見が多かった。

利用者も、同性介護の徹底は困難と理解しながらも、肌の露出する介護においては同性で行なうことを求めている。（参照 表9—①・②、表10—①・②）

## 7. 結論

アンケートを実施する前に、「男性利用者が女性職員に介護されることにはあまり抵抗はないが、女性利用者が男性職員に介護されることには抵抗があるのではないか。特に入浴介護や排泄介護の場面ではそれが、多く感じられるのではないか」という仮説を立てたが、アンケートの結果、それがある程度実証できた。しかし、当初、自分たちが思っていたほどの異性介護の抵抗は、職員・利用者ともに少なかったように思える。利用者は何がなんでも同性介護を望むというよりは、介護者の人としての質及びプロとしての介護技術を求めているのではないかと言う事が研究を通じて理解できた。また同性介護を望む要因として「性的な羞恥心」が大きく作用すると考えていたが、起居や移乗動作等では、むしろ“力”と言う面で性差をとらえている事が伺えた。このことは今後別の面からも異性介護を考えていく上で大きな収穫であった。とはいえ、介護の内容においては同性介護を望む利用者がいることも事実である。本来同性介護の考え方は、サービスを利用する利用者本位、またその人権の面から考慮されるべきものである。本研究において男性介護者が増えている現状では、同性介護のあり方について今後も考えていく必要がある。同性介護の徹底は困難ではあるが、例えば異性介護に抵抗のある場面では職員の配置や介護技術の工夫が必要とされて来る。

この研究を通じて、異性介護に抵抗のある場面を知り、それを受ける利用者の思いも知った。それを今後の介護に活かしていく事が、よりよいサービスの向上に繋がると考える。

## 8. 謝辞

本研究を行うに当たり御多忙の中何度も御指導を頂いた矢原先生と、本調査の実施に当たり御協力を頂きました山口県身体障害者療護施設の関係者の方々、また下関幸陽園の利用者の皆様に心からお礼申し上げます。

## 9. 引用文献・参考文献

- ・『はじめての介護研究マニュアル アイデアから研究発表まで』保育社 矢原隆行 H18,10,1
- ・『介護における男性介護職の諸問題に関する実態調査』社団法人雇用問題研究会 H16,3